# 防災・減災のページ

毎月11日掲載

## ■むすび塾に参加して

東四郎丸児童館

【地域を探検して】通れそうな道なのに、草がたくさん生えてふさがっていた。＝袋原小3年・桜井橙亜君(8)

【地域を探検して】消火水槽や消火栓のある場所が分かって良かった。＝東四郎丸小3年・江畑宏亮君(8)

【地域を探検して】曲がった電柱があった。地震で揺れたら怖い。＝東四郎丸小2年・福田環菜さん(7)

【地域を探検して】30分で歩ける範囲に、たくさん消火器があることに気付いた。＝中田中2年・武田愛花さん⑬

【地域を探検して】コンビニエンスストアが地域に協力し、災害時に水やトイレを提供することを知った。＝中田中2年・佐藤名波さん⑬

【地域を探検して】桜並木と水路の間の柵に隙間があって危ないと思った。＝東四郎丸小5年・穀田愛鈴さん⑩

【地域を探検して】高いブロック塀は、地震が起きたら危ない。地域にもたくさん危険な場所があると思った。＝東四郎丸小5年・遠藤結心さん⑩

【地域を探検して】倒れそうな木や傾いた電柱があって危ないと思った。学校で「避難所」の看板を見つけた。＝東四郎丸小4年・福田大地君(9)

【地域を探検して】非常時に使うものを普段から気に掛けて、備えておくことが必要だと思った。＝仙台南高2年・狩野愛実さん⑯

【地域を探検して】普段何げなく通る道でも細かく見ると危険がある。今後は気を配って歩きたい。＝中田中2年・狩野愛結さん⑬

## 巡回ワークショップ　＠仙台市太白区　東四郎丸児童館

### 損保協会協賛　防災マップ作製体験

# 設備や危険箇所を記入

東日本大震災の教訓を今後の備えに生かすため、河北新報社は5月31日、通算43回目の巡回ワークショップ「むすび塾」を仙台市太白区の東四郎丸地区で開いた。協賛する日本損害保険協会（東京）の安全教育プログラム「ぼうさい探検隊」を取り入れ、子どもと保護者らが地域の危険箇所や避難路を点検。市東四郎丸児童館で防災マップを作り、課題を話し合った。

小学生6人と保護者、児童館の行事を企画運営する「チーム東中田っ子」の中高生4人、児童館職員ら18人が参加した。太白消防署員の案内で地区の防災資機材倉庫と水防倉庫を見学。その後、3班に分かれて市営住宅や住宅街、公園を歩いて回り、防火水槽やブロック塀、幅の狭い道路の位置などを確認した。

児童館に戻ると、班ごとに地図に設備や危険箇所の位置を示すシールと、現状を説明する付箋紙を貼って防災マップを作製。つぶさに観察した結果をマップに反映させ、子どもたちが点検結果を報告した。

仙台南高2年の狩野愛実さん⑯は、市営住宅の敷地に消火器や消火栓が多数あることを紹介。「看板などがなく見過ごしてしまうことが多く、防火水槽も草むらに隠れて分かりづらかった。緊急時に備え、すぐに分かるようにすべきだ」と指摘した。

中田中2年の佐藤名波さん⑬は公衆電話ボックスに触れ、「震災発生時は携帯電話より公衆電話の方がつながりやすい。役立つと思う」と活用を提言。東四郎丸小4年の福田大地君(9)は「地割れしている所や倒れそうな自販機があった」と身近な危険箇所に注意を呼び掛けた。

児童館の小岩孝子館長は「震災時、東四郎丸小は津波が近くまで押し寄せていたため避難所にならず、児童館に約300人が避難した」と振り返り、地域に根差した防災対策の必要性を強調。進行役を務めた減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長は「震災で体験した記録を後世にしっかり残すことが大事だ」と伝承の大切さを説いた。

むすび塾を損保協会と連携して開くのは昨年11月の多賀城市桜木南地区に次いで2回目。協会啓発・教育グループの木舟作楽リーダーは「自然災害には逆らえない面もあるが、知識と備えがあれば対処できる。子どもの頃から防災・減災の意識を持ち、地域のリーダー役になってほしい」と児童生徒らに訴えた。

小中高生たちは地域を点検した後、危険箇所や防火水槽などを防災マップに記入し、発表した。防災倉庫も見学した

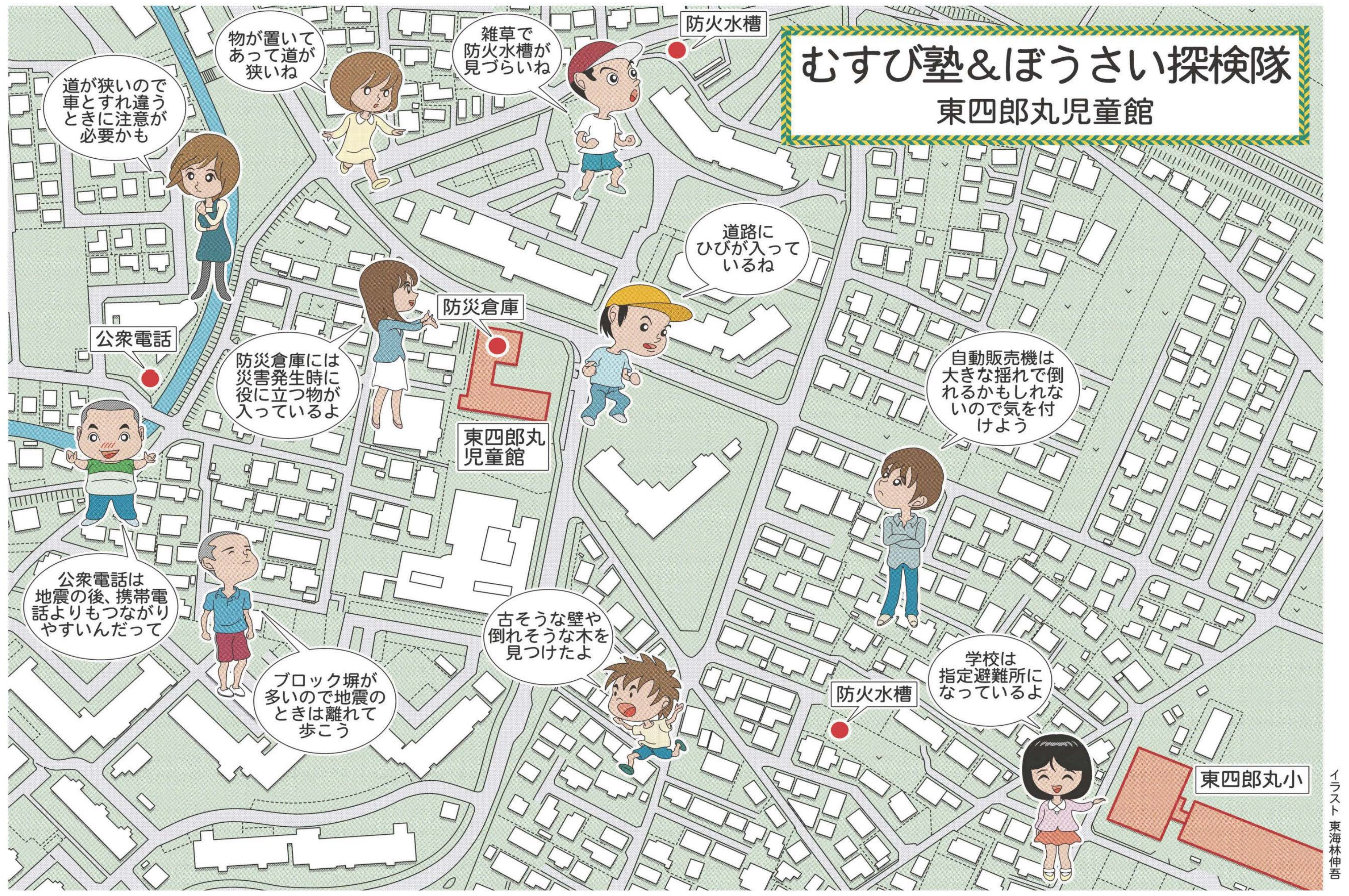

むすび塾＆ぼうさい探検隊
東四郎丸児童館
防火水槽
雑草で防火水槽が見づらいね
物が置いてあって道が狭いね
道が狭いので車とすれ違うときに注意が必要かも
道路にひびが入っているね
防災倉庫
公衆電話
防災倉庫には災害発生時に役に立つ物が入っているよ
東四郎丸児童館
自動販売機は大きな揺れで倒れるかもしれないので気を付けよう
公衆電話は地震の後、携帯電話よりもつながりやすいんだって
古そうな壁や倒れそうな木を見つけたよ
ブロック塀が多いので地震のときは離れて歩こう
防火水槽
学校は指定避難所になっているよ
東四郎丸小

イラスト　東海林伸吾

## 子どもの意識向上目指す

### ぼうさい探検隊　損保協会が推進

ぼうさい探検隊はマップ作りを通じて子どもの防災や防犯意識の向上を目指す事業で、日本損害保険協会が2004年に始めた。全国各地で開催し、年1回コンクールで優秀な取り組みを表彰している。

小学校や子ども会、少年消防クラブなどの単位で、小学生と大人が地域を探検。防災、防犯、交通安全の面で危険な箇所などを点検して、地図にまとめる。

防災の場合は、ブロック塀や自動販売機など、地震で倒れる恐れがある場所や物のほか、避難場所、防災倉庫など被災時に役に立つ施設を確認する。児童が作った地図をきっかけに、自治体が危険箇所を改修したケースもあった。

社会貢献事業として防災・減災啓発活動に取り組む損保協会の協賛を得て、河北新報社は年2～3回、定例のむすび塾に探検隊のノウハウを取り入れて開催する。

損保協会は、プログラムを円滑に進めるため、準備作業から当日のスケジュール案などを掲載した実施マニュアルを作成。探検やマップ作りに使う画板やペン、シールをまとめた実施キットを無償提供している。

ぼうさい探検隊の連絡先は協会安全安心推進グループ03（3255）1294。

## ■専門家から

### 見えないものに関心を

減災・復興支援機構理事長　**木村　拓郎さん**

東日本大震災時に起きたことと起きなかったことがある。起きなかったことが、今後も起きないとは限らない。東日本大震災と異なるタイプの地震が、ひょっとしたら地区の真下で起きるかもしれない。大丈夫だと思い込まないでほしい。

今回のように目で確かめる点検も大事だが、見えないものもある。一例が地盤だ。地震は地盤次第で大きく揺れたり、液状化が起きたりする可能性がある。地盤を調べてみてはどうか。

1人暮らしや日中1人で家にいる高齢者の存在も見えにくい。地震が起きたら、けがをしていないかどうかなどを児童生徒の皆さんが声を掛けて確認する活動があれば安心だ。防災・減災は見えない部分も大事だ。関心を持ってほしい。

### 訓練と共に草むしりも

減災・復興支援機構専務理事　**宮下　加奈さん**

東四郎丸を歩いた時、草に覆われて看板も見えない防火水槽があった。いざという時に使えなければ意味がない。防犯や防災を考え、地域の住民で協力して定期的に草むしりなどをしてはどうか。

草むしりなら高齢者や子どもも参加できる。炊き出しの訓練と組み合わせてもいい。震災について話したりできることを考えたりする機会になり、きれいで住みやすい街づくりにもつながる。

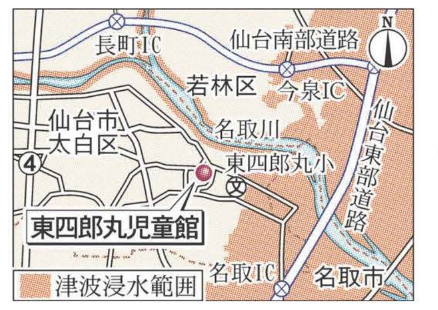
住民同士のあいさつも大切だ。小中高生の皆さんには、助け合いの関係を築けるよう、防災の活動を地域の人と共有してほしい。

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に、地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域と人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。

次回の「むすび塾」は27日、栗原市栗駒の耕英地区で開催します。

## むすび塾

### 名取・閖上地区に隣接



仙台市太白区の東四郎丸地区は市南東部に位置し、東日本大震災で甚大な津波被害を受けた名取市閖上地区に隣接する。太白区四郎丸大宮、四郎丸昭和北などを含む東四郎丸小の学区と重なる。

2014年5月現在、2224世帯、5376人が暮らす。かつては農村地帯で、1960年代後半以降に宅地開発が進んだ。地区には四郎丸と四郎丸東の二つの大規模市営住宅がある。

震災では東四郎丸児童館から数㌔の場所まで津波が迫った。

### 児童館の3・11 小岩館長が振り返る

# 地域とのつながり 大切

東日本大震災の発生当日、東四郎丸児童館には300人近い住民が身を寄せた。指定避難所ではなかったため、児童館のスタッフは戸惑いながらも懸命に避難者を受け入れた。

午後4時ごろ、津波警報が鳴り響く中、住民が次々と児童館に避難してきた。車いすの住民もいる。「自宅に帰すことはできない」。館長の小岩孝子さん(63)は受け入れを決め、避難者に呼び掛けた。

「ここも津波の心配がある。西側の避難所に移動するかどうか、各自で判断してください」

約260人が児童館に残った。小岩さんは前年に体験した避難所運営のシミュレーションを思い出し、病人や子ども連れなど、避難者の事情に応じて部屋割りを決め、名簿を作った。

中学生は避難者に食料を配り、お年寄りはラジオで情報を集めた。人の波は夜中まで途切れなかった。翌日からは東四郎丸小に避難者を集めることになり、「緊急避難所」としての児童館の役目は終わった。

その後も児童館スタッフは炊き出しなどの支援を続け、住民からは食材や情報の提供を受けた。小岩さんは「みんなができることをしようと努めた。日頃から地域とのつながりがあったからこそ、助け合えたことを伝えたい」と振り返る。

震災後、児童館のスタッフや子どもたちが地域の高齢者らに食料を送り届けた＝2011年３月中旬（東四郎丸児童館提供）

小岩孝子さん

---

# いのちと地域を守る

## 伝える

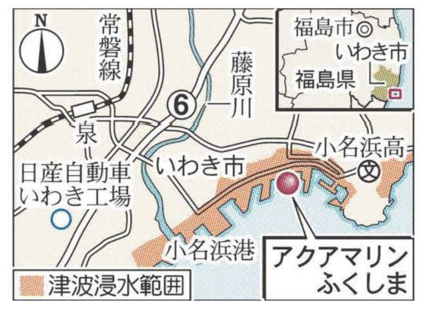
2011.3.11

### ■避難誘導後に津波来襲（いわき市）

# 閑散期が幸い 混乱生じず

いわき市の水族館アクアマリンふくしまの職員金成美枝さん㊲は、大津波警報を受け来場者を避難誘導した後、押し寄せる津波を目撃した。

金成美枝さん



東日本大震災の発生時は建物1階の事務室にいました。携帯電話の緊急地震速報が鳴ったので、室内のテレビをつけようとしたら大きな揺れに襲われました。揺れが収まった後、職員はトランシーバーを持って館内に散らばり、来場者の避難誘導を始めました。

館内には当時、約150人の来場者がいました。津波が来るまで少し時間がありそうだったので、館外に逃げてもらうことにしました。館内にとどまろうとする人もいましたが、半ば無理やり抱きかかえて外に連れて行きました。

不幸中の幸いは閑散期だったことです。大型連休や夏季は多いときで1日に約1万8000人が訪れます。繁忙期に起きていたら職員もパニック状態となって避難誘導が混乱し、道路も車で渋滞して逃げ遅れる人が出たかもしれません。

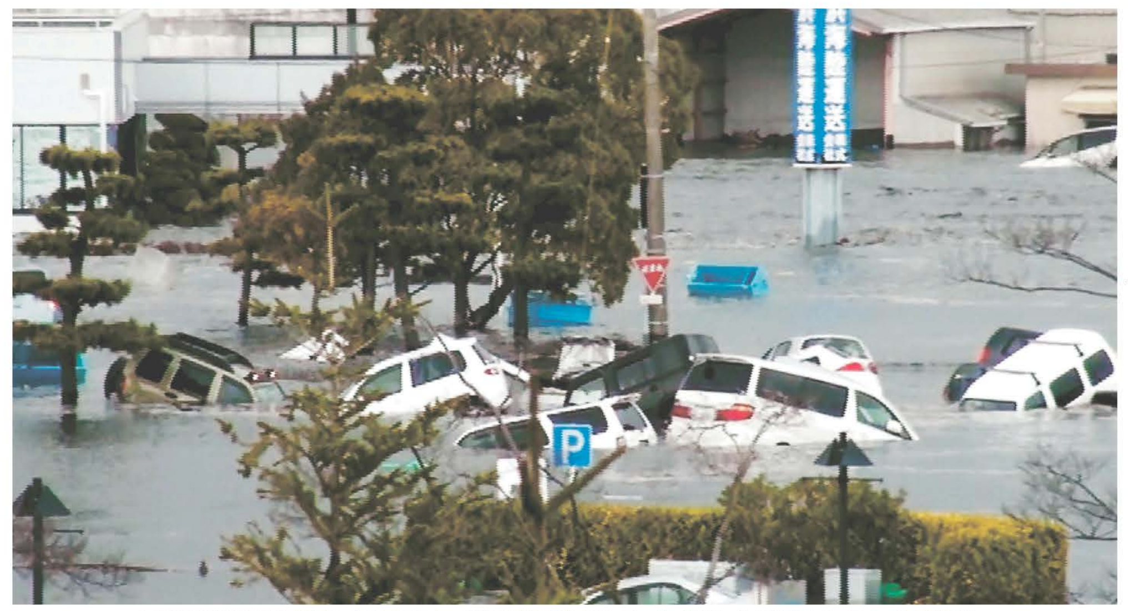
来場者を誘導後、約80人いた職員は館内最上階の3階に避難し、窓越しに海の様子を見ていました。建物は宮城県沖地震を想定して震度6まで耐えるように設計されており、大きな被害はありませんでした。

海の底が見えるほど潮が引いた後、海面が盛り上がり、午後3時20分ごろに津波の第1波が建物そばの岸壁を越えました。駐車場に止めていた自分たちの車が流されたり、停泊中の船が沈んだりするのをぼうぜんと見ていました。

1階の浸水は10㌢ほどでしたが、電気設備のあった地下1階に津波が流れ込み停電になりました。水温調節も、ろ過もできず、生き物たちがどんどん死んでいきました。

津波が夜になっても続いていた上、建物周辺は地盤沈下と液状化の影響で外部と遮断され、3階で夜を明かすことになりました。館内には水槽を移動させる際に使う毛布や熱帯魚の運搬時に使う使い切りカイロがあり、暖を取ることができました。

震災前の防災訓練は火災のみの想定でしたが、震災後は津波を想定した訓練を始め、津波からの避難誘導マニュアルも作りました。どちらにも震災時の経験が反映されています。



津波で流される職員らの車＝2011年３月11日（アクアマリンふくしま提供）

## 探る

### ■新指針「仙台行動枠組」

# 心と体の健康を重視

東北大教授　**江川　新一さん**

2005年の第2回国連防災世界会議で採択された国際的な防災の行動指針「兵庫行動枠組」は、その成果として災害に強い病院や学校を世界中に増やした。仙台市で3月に開催された第3回会議で決まった新指針「仙台行動枠組」は、心と体の健康を防災の中心目標にしたのが特徴だ。

兵庫行動枠組に「健康」の文言が登場するのはわずか3回。だがその影響は大きく、世界保健機関（WHO）や世界銀行が病院の安全性向上を目指すキャンペーンにつながった。

仙台での国連防災世界会議に際しては、われわれを含む関係者が防災に健康の視点を取り入れる重要性を国際会議の場で繰り返し発信してきたことが実り、仙台行動枠組には健康の表記が34回も入った。

世界各国が健康水準の向上に取り組む根拠となり、日本にとっては災害派遣医療チーム（DMAT）など優れた取り組みの輸出が可能になる。被災地仙台にも、防災を総合的に考える拠点として注目度が上がる意義がある。

ことしは国連防災世界会議に続き、9月に持続可能な開発目標サミット、12月に気候変動枠組み条約第21回締約国会議（COP21）があり、各分野で国際的な枠組みが改訂される重要な年に当たる。

実は防災と気候変動、開発は相互に深く関わっている。気候変動によって台風やエボラウイルスといった災害や感染の危険が増す恐れがあり、建物建築で防災に配慮した設計にしないと簡単に倒壊するなどして開発資金を無駄にしてしまうからだ。こうした関係性に留意し、対応と備えの強化に力を入れる必要がある。

東日本大震災では阪神・淡路大震災を教訓にした防災対策の成果が表れ、負傷者が大幅に減った。一方で震災関連死の増加や心の健康へのダメージなど新たな課題も生じた。健康は災害発生時だけではなく、今も続く問題になっている。

東日本大震災では医療機関も大規模被災し、他機関からの支援が必要な状況になった。保健・医療機関だけで人々の健康を守るのは困難で、さまざまな他分野（クラスター）との協働が大切になる。

国連人道問題調整室（OCHA）はクラスターアプローチという考え方を掲げ、「食」「運輸」「住宅」など各分野を担う関係機関が連携して対応する必要性を打ち出している。災害時、人々の健康を守るため、それぞれのクラスターが協力し合う姿勢が不可欠だ。

えがわ・しんいち　東北大医学部卒。国立がんセンター研究所、米国ピッツバーグ大留学、東北大消化器外科勤務などを経て12年から東北大災害科学国際研究所教授。専門は災害医療と膵臓（すいぞう）疾患。53歳。会津若松市出身。

## 現場から

### 予告なしの訓練 毎月継続

南三陸ホテル観洋
（宮城県南三陸町）
託児所「マリンパル」主任
小野寺ひとみさん（45）

託児施設で０～４歳の子どもたちを預かっています。東日本大震災後、避難訓練を毎月実施し、子どもと職員の安全をどう守るか、検証を続けています。

訓練は予告せずに始めます。職員が棚を揺らして「地震です」と呼び掛け、子どもに頭を手で守って縮まる「ダンゴムシ」のポーズをとらせます。その後、ベビーカーなどで５分以内に裏山へ避難します。

震災発生時は昼寝中で寝間着の子どもに寒い思いをさせました。今は普段着で寝させるなどすぐに行動できるよう備えています。命を守るには、小さいころからの意識付けが大切です。

### 減災効果算出 避難に活用

山形県危機管理課長
橋本　仁さん（54）

政府調査検討会が昨年８月に発表した日本海の津波推計は、県の従来想定を大きく上回る内容でした。昨年12月に県の検討委員会を発足させ、被害想定や避難計画を練り直しています。

検討委では、適切に避難した場合、人的被害をどの程度減らせるかを表す減災効果の算出に取り組みます。すぐ避難することの大切さを数値で示し、防災意識の向上につなげたいです。

来年３月までに被害想定を公表し、来年度にはハザードマップを完成させる目標です。いざという時に役に立つ避難計画にするため、現場を観察し実態を把握するよう心掛けています。